

子どもと出会う(6)

聴くということ

岩田 純一

子どもの声を「きく」ことは、子どもを「みる」ことと並んで保育実践の原点でもある。しっかりと「みる・きく」ことが、子どもの心の動きをよりよく知ることに繋がるからである。

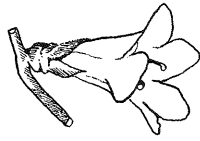
ところで保育の場におけるコミュニケーションは、やはり言葉がよりどころとなる。それは、「話す」「きく」という相互の行為からなっている。しかし、保育

の場ではどちらかというところ「きく」よりも「話す(表現)」ことに主眼が置かれてきたように思われる。保育者は子どもにどのような言葉かけをするかといった保育実践や、子どもがじぶんの経験や考えをいかに筋道立てて話せるようになるかといった言葉の面がより重要視されてきた。それは、おそらく「話す」に比べて、「きく」がたんに相手の言葉を受けとる

だけの受動的な行為とみなされてきたことによるのかも知れない。したがって保育のなかでは、どちらかというところ「訊く」といったことに保育の関心があったように思われる。それでは、「きく」という行為は受動的であり、「話す」ことに比べて、それほど重要ではないのであろうか。

「聞く」と「聴く」

ところで、今までは「きく」とひらがなで表記してきたが、この「きく」には微妙に異なった意味を区別する二つの漢字がある。それは「聞く」と「聴く」である。一般的によくみかける「聞く」は、へきくとはなしにきこえてくる」といった意味をもっている。聞



き違え、聞き流す、風聞、伝聞、新聞といった言葉をみれば、その意味のニュアンスがよく分かっていただけである。それに対して後者の「聴く」は、耳を傾けて注意してきく、耳

を澄ませてきくといった行為を意味している。それは、傾聴、拝聴、静聴、聴診器、聴取などの言葉をみれば明らかであろう。

それでは、われわれの日常会話のなかの「きく」行為を振り返ってみよう。よくみると、往々にして、われわれは相手の話すことを聞いてはいるが、聴いてはいることが多いのではなからうか。人はすでにじぶんなりの考え、期待、信念、欲求、知識といった枠組みをもってきいている。したがって相手の話を、じつはそのようなじぶんの枠組みをくぐらせてきいてしまう。相手の話すことをじぶんの枠組みを介して受けとめ、意味づけることになるのである。その結果、知らず知らずに、相手の話をじぶんの都合のよいような勝手なきき方をしてしまっている。じぶんのききたいことだけをきき、じぶんのモノサシから相手の話を評価的に裁断しながらきくことにもなりかねないのである。また、われわれは相手の話すことを十分に聴く前に、相手の話を取ってじぶんの考えや意見を話

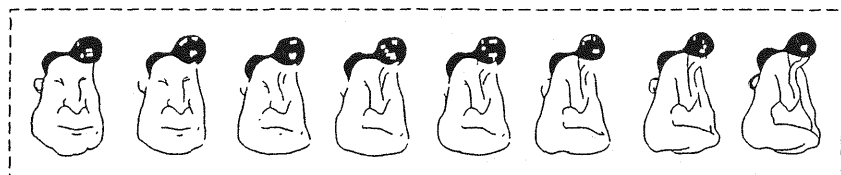
すことに腐心していることが多いのではなからうか。

先に保育実践の原点として、「きく」とならんで「みる」を保育の原点としてあげたが、「みる」も同じようなことがあてはまる。一般的にわれわれは、じぶんの欲求・期待・情動といった主観的な枠組み（モノサシ）に拠った見方をしがちである。下図をみていただきたい。右端ないし左端だけの図をみると、それぞれ明らかに女性像と男性の顔にみえる。ところで、中央の絵は単独でみせられると、男性の顔にみえたり女性像にみえたりが人によってちょうど半々くらいである。しかしながら右端の女性像からスタートして左へと順番にみせられていくと、中央を過ぎても女性像にみえ続け、逆に左の男性の顔から始めると中央を過ぎて明らかに女性像に変化したにもかかわらず、なお男性の顔にみえてしまうのである。

このようにじぶんのもつ先入観・先入見などに基づいた思い込みの強い見方をしていることがうかがえるだろう。あるがままをみることの難しさがわかるであ

ろう。ヒトはいつもじぶんがもっている内的なモノサシからきいたり・みたりしてしまうのである。それが現実をみる目を曇らせ、とさとして現実を歪めて捉えさせることにもなる。とく

に人が人を見る場合には、だからこそ、人を色メガネで見る、レッテルをはって見るといった偏見が社会的な問題になつてもくるのである。このように考えると、じぶんの枠組み（我）からみる・きくのではなく、そのものをそのものとして、そのことをそのこととして「みる・きく」がい



▲図 男性の顔と女性像 (Fisher, 1968)

かに難しいことであるかが理解していただけるだろう。たとえば、身体に障害や不自由を抱えている人が、その不自由さを訴えても、健常である者には、ほんとうにその立場（身）になってその不自由さを視る・聴くことがいかに難しいものかを思い起こせばよいだろう。

保育の場においても、子どもの声を聴くことの難しさもここにある。保育者が、じぶんをモノサシ（基準）にして聞けば、子どもの声を聴くことはできない。そのような「聞く」は、じぶんの思い・先入観を押しつけた、ともすれば一人よがりなきき方に陥ってしまうことになる。このようにみると、子どもの話したいことをそのまま受けとる、子どもの言葉にほんとうに耳を澄まして「聴く」ということは、じつは存外と難しい保育行為のように思える。

「聴く」ことと条件

それでは他者の声を「聴く」ためにはどのような条

件が必要になるのであろうか。哲学者の鷲田は、相手の話すことを無条件に、無条件の肯定として受けとめる、すなわち相手の話に自己を差し出すことであり、無条件に相手を迎え入れることであるという。それには、じぶんの同一性への固執、つまりじぶんというもののへのこだわりを捨てて、相手にじぶんを差し出し、相手をじぶんのなかへすっぽりと迎え入れる態度が必要となる。したがって「聴く」ということは、少なくともおのれの同一性（我執）の外へ出る用意があることを意味している（鷲田清一著『「聴く」ことと力』TBSブリタニカ、一九九九）。それは、相手に身をおいて、相手の身になって「きく」のである。

犬の散歩を例に考えてみたい。こちらに余裕がないと、こちらの都合に合わせて犬の散歩も早く切り上げ犬を引っ張るようにして帰ってくる。犬を散歩させてはいるけれども、まさに気もそぞろな私にとつて犬（の気持ち）などは不在である。しかし、こちらに余裕があるときは、引っ張るにまかせて犬に付き従い、

犬の身になって同じように動くことが可能である。すると、今、犬が何に関心があり、何をしたいのかといった犬の気持ちを手綱を通して伝わってくる。まさに、じぶんのペースを捨て、無条件にじぶんの時間を相手にあげるとき、犬の心を「聴く」ことができるのである。同じようなことは、保育者と子どもの日常的なかかわりのなかでも言えるのではなからうか。

このように「聴く」ことが、話し手にとって癒しの働きをもつことも臨床的な経験から明らかである。話してどうなるものでもなく、相手にどうこうしてほしいというものでもないが、とにかく一人では背負いきれないじぶんの辛さ、不満や心配事を相手に聴いてもらい、受けとめられたと感じるだけで気持ちが楽になり、ときに癒されるといったわれわれの経験を思い起こせばよい。ときに、それがその人の生きる力を支えていく助けにさえもなるのである。また「聴く」ことは、話し手にとって、じぶんのことばがたしかに受けとめられ、相手がじぶんとともに感じてくれている、

じぶんが相手と繋がっているという実感をもたらず。そのなかで話し手は、その聴いてくれる他者の胸をかきながらじぶんと向き合い、じぶんの気持ちを整理・理解していく助けになるのである。

じぶんの考えや価値観にこだわり、それを話し手に押し付けながら聞くのではなく、そのようなじぶんへの枠組みへの固執を捨てて（殺して）、ただその場に一緒に臨み、相手の声にじつと耳を傾ける。そこにこそ、話し手にとってはじぶんの言葉を受けとめ、共に考え、共に感じてくれる他者が立ち現れてくるのである。そのとき話し手は、じぶんの本音をポツリポツリと語り始めることになるのである。これがまさに受容としての「聴く」であり、まさにきき上手とはこのような「聴く」をいうのであろう。心理臨床の場面では、このような「聴く」という行為が根幹を成し、そこにクライアントとセラピストの心が繋がっていくのである。このような聴く態度は、臨床的な場面だけでなく、保育実践のなかでは子どもとかかわる保育者の

重要な技能となるように思われる。

保育のなかで「聴く」

「聴く」ことの難しさは、子どもとやりとりする保育者にも同じように言える。保育者がじぶんという我へのこだわりを離れて子どもの声に耳を傾けて「聴く」ことが、やはり子ども的心とほんとうに出逢い・繋がっていくことを可能にさせるのであろう。

そのような「聴く」は、保育者が子どもの身になって共感的に臨むということである。それは保育者が子どもの立場になって、子どもの身からじぶん自身を対象としてみつめ直し、捉え返すといった自己の相対化を可能にしていくことでもある。保育者が子どもという鏡から、子どもにとってのじぶんをみつめ返すのである。そこに、保育実践を通して保育者自身も育つといった契機が生み出されていくように思われる。また、子どもを無条件の肯定としてじぶんの内に迎え入れることは、子どもからも保育者がその内に迎え入れ

られることに繋がっていく。まさに保育者と子どもの信頼関係も、そのような関係性のなかでこそ培われていくように思える。

ここで少しコミュニケーションのことに話を戻してみよう。コミュニケーションは、「話す」と「きく」という行為からなっている。しかし、どちらかというと保育のなかでは、「きく」の重要性が「話す」に比べてはそれほど唱えられてこなかった。このことは最初にも述べた通りである。それでは「話す」という行為を考えてみよう。

一般的な会話・対話のなかで、そもそも相手に何かを話すという行為は、そのやりとりのなかで相手に「応じる」ことではなからうか。保育の場においても、保育者が子どもに話すのは、子どもの声を「きく」ことのリアクションとしてある。すると、うまく



へ応じるゝためには、まずへ受けとるゝことが、その出発点にあるように思われる。しつかりと子どもの声を「聴く」ことこそ、それにうまく応じて「話す」と、すなわち、そのときに子どもがもつとも求めている言葉、子どもの心に届く言葉を話すことができるのではなからうか。さもなければ、保育者は子どもの思いとはズレた、トンチンカンな応答をしてしまうことになる。

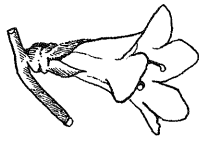
そのように考えてみると、まさに「話す」ことは「聴く」ことから始まるといつてもよいのではなからうか。子どもにとつても、じぶんの話を傾けて聴いてもらえる経験の積み重ねが、人の言葉をしつかり「聴く」力を子どもから育み、さらに相手に応じてしつかり「話す」力を培っていく基盤ともなっていくように思われる。子どもはじぶんの思いを受けとめ、それに耳を傾け共感的に聴いてくれるからこそ、さらに話そうとするのである。それが、子どもから言葉をひきだし、話す力を育てていくように思われる。

「聴く」ことは、子どもの心を聴こうとすることである。したがって、その意味では「聴く」という行為が、たんに音声としての言葉だけにとどまらず、言葉にともなう表情や身振りといった身体全体の表現をトータルな声として受けとめなければならぬ。このような「聴く」という行為は、まさに身体ごとスッポリと子どもを迎え入れる態度・姿勢にあるとき成り立つように思われる。

さいごに

保育者の「きく」といった行為には、副次的な重要性しか与えられてこなかった。しかし、ここでもう一度、子どもの声を「聴く」という受動的にみえる行為の意味を問い直してみる必要があるのではなからうか。もちろん保育の場では、保育者がイニシヤティブを発揮し、子どもの行為を方向づける適切な保育者の言葉が求められる。しかしながら、この保育者の言葉があまりにも一方的になってしまうと、ときに子ど

も本来の能動性や主体的な声を犠牲にしてしまう危険性をあわせもっているのである。保育者の言葉が支配的になればなるほど、子どもを受動的にさせてしまうことにもなってしまうのである。保育者が一方的に話せば話すほど、子どもは話さなくなり、また保育者の速射砲のような大声に耳を傾けて聴くといったこともなくなってしまう。その結果、保育室には子どもへの指示・命令の言葉で喉をからした保育者の声だけがむなしく響いているといったことにもなりかねない。これは、保育の現場においてしばしば見聞きするところである。



このように考えると、保育者が「話す」といった行為だけでなく、子どもの声を「聴く」といった側面が保育にとつてもつ意義をもう一度見直して見る必要がある。じつは子どもの声を「聴く」といった保育者の受動(受容)のなかでこそ、子どもはじぶんが受け入れられているという所在感

を抱き、そこで子ども自身の主体性・能動性が動き出していくのではなからうか。そのような保育の場づくりこそ、子どもが保育者とのみならず、仲間と活発に向き合っていく力を育むのではなからうか。その意味で、子どもの声を聴く保育者の姿勢や行動は、一見すると受動的で静的なようにみえて、じつは保育者から子どもへのもう一つの重要な能動的な働きかけではなからうか。

(京都教育大学)